

# 初級文型応用表現練習法 (1)

(初級文法研究会)

安齋幸枝 小野正樹 蒲谷 宏  
今野尚子 竹内信人 久光直子  
深田嘉昭 星崎幸子 松木正恵

## はじめに

本稿は、初級文型の表現をできるだけ自然な表現に近づけるための練習方法について述べたものであり、いわば、初級文型応用表現練習のためのアイデア集とでもいべきものである。機械的なドリルではなく感情を伴った表現練習を通じて、学習者にその文型の用法を身につけさせることが目的となっている。

記述の形式としては、まず、その文型の用法上の特色、指導上の留意点などを簡単に解説してから、いろいろな場面設定や例文などを用いて、練習方法について説明していくことになる。ただし、説明のしかたは、文型によって異なる。

なお、文型の提出順は、早稲田大学の初級日本語教科書に基づいている。今回は、第1課から第21課までの文型を扱うことにした。

練習方法のアイデアは、原則として初級文法研究会において検討したもののだが、文責はそれぞれの項目の執筆担当者にある。アイデア自体、未熟なものや、すでに実践されているものも多いかとは思いますが、初級教育

\* 本稿に用いた略号は、次のとおりである。

T...教師 S...学習者 N...名詞 Aj...形容詞 AjN...いわゆる形容動詞  
Adv...副詞 V...動詞 Vi...自動詞 Vt...他動詞  
A, B, ...いくつかの品詞が入るときの総称

を考えるための一つの叩き台という意味で公にすることにした。問題点のご指摘、ご教示をいただければ幸いである。

### 1. $N_1$ は $N_2$ です (L1)

- 受け手が  $N_2$  についての情報を持っていると不自然な会話となるので、 $N_2$  には受け手の知らないものを使用する。もしくは、箱に入れるなどして、わからないようにしておく。
- 受け手が知らないという点と、語彙量の少なさを考慮して、学習者の母語の単語も使用する。

### 2. こ、そ、あ、ど (L1, L2)

- 「こ、そ、あ」が単なる距離の違いで使い分けられているのではなく、話し手と受け手の領域との関連で使い分けられていることを理解させる。
- 「これ」「ここ」の指示するものの違いをはっきりとさせる。(特に建築物の場合)

#### (練習方法 1)

学生と共に教室の外へ出て、学生の知らない学校の施設や、建物、または近隣の建物、施設について、それらの名称を教える。次にテストと称して一カ所ずつ質問をしていく。その際にわからないことを学生同士で質問させる。実際に歩いて、入ることのできる所には入った上で「ここ」を使う。

#### (練習方法 2) プレゼント

ふたにリボンを付けた箱を用意し、学生同士でプレゼントの受け渡しをさせる。中味はいろいろと用意し、渡す役の学生に入れ替えをさせる。

例  $S_1$   $S_2$  と会ってあいさつをする。手にはプレゼントの箱を持っている。

$S_2$  あいさつの後で、「その箱(それ)は何ですか。」

$S_1$  「(これは)プレゼントです。」プレゼントを差し出す。

$S_2$  箱をゆすって中の音を聞いて、「これはなんですか。」

S<sub>1</sub> 「それは...です。」

S<sub>2</sub> 箱を開けて、「あっ本当だ。どうもありがとうございます。」

S<sub>1</sub> 「どういたしまして。」

### (練習方法 3)

日本地図のパズル(都道府県がその形に切り抜いてあるもの)を用意する。教室には、都道府県の場所と名前、形がわかるような地図を用意しておく。パズルのラベルはバラバラにして並べる。学生には都道府県名を書いたくじを引かせる。その上で、

例 T 学生を指名する。

S<sub>1</sub> 自分の引いたくじの県を T に聞く。「～県はどれですか。」

T パズルのラベルを指して、「それです。」

S<sub>1</sub> 「これですか。」

T 「はい、そうです。」正しいラベルを取るまでくり返す。

S<sub>1</sub> 学生全員に対して、「これは～県です。」

これを学生全員にやらせる。そして、次に、

T 指名する。

S<sub>1</sub> もう一人学生を指名して、「S<sub>2</sub> さん、～県はどこですか。」

S<sub>2</sub> 地図上の場所を示して、「ここです。」

S<sub>1</sub> 自分のラベルをパズルの台紙の上において、「ここですか。」

S<sub>2</sub> 正しい場所になったら、「はい、そうです。」

次に S<sub>2</sub> が S<sub>1</sub> の役割をする。

### 3. 数の数え方 (L2)

「イチ、ニ、サン、ヨン、ゴ、ロク、ナナ、ハチ、キュウ、ジュウ」と教える。4, 7, 9, の数え方は日本人でも人によって異なるので、「ヨン、ナナ、キュウ」を使っても不自然ではない。「シ、シチ、ク、」と教えた場合よりも、助数詞を付けた時の例外が少なくなる為、学習者の混乱が少なくて済むと思われる。「シ、シチ、ク」に関しては、参考程度に紹介し、記憶はさせなくてもよい。

#### 4. $N_1$ の $N_2$ (L3)

- $N_1$  は  $N_2$  に対して情報をつけ加える。
- $N_2$  は、それが何か明らかな場合は省略される。

(練習方法)

トランプを2組用意し、それぞれから学生の人数分のカードを同じカードが2枚ずつになるように抜き出す。片方を学生に配り、もう片方はよくきって積んでおく。

T 積んである一番上を自分では見ずに学生に見せて、「 $S_1$  さん、このカードは何ですか。」

$S_1$  「そのカードは...(マーク)の~(数)です。」

T 「だれのカードですか。」

$S_2$  同じカードを持っている学生。「私のカードです。」

次は  $S_2$  に T の役割をさせて学生全員に次々行わせる。

#### 5. $N$ は $A_j$ です (L3)

- 程度を表す  $A_j$  が、相対的な評価であることを認識させる。
- 形式的なドリルではなく、学生自身の評価を入れて練習させる。

(練習方法)

いろいろなサイズの身につけるものを用意する。(例、ベルト、サンダル、指輪、帽子など、サイズに個人差があり、すぐに着脱できるものが良い。) 同じものを数人の学生に試し、それぞれの評価で発話させる。

#### 6. $N$ は $A_jN$ です。(L4)

- $A_jN$  が個人の主観的評価によるところも大きいことを認識させる。
- $A_j$  との形の違いを強調し、形の混同をしている場合は、この段階から正しく指導する。

(練習方法)

複数の男性、女性、乗り物、花などの絵または写真を用意する。

例 T 「この花はきれいですか。」花の写真の一枚を学生に見せて、数人に答えを言わせる。



S 「はい、きれいです / いいえ、きれいではありません。」

同じ写真を複数の学生に見せたり、一つのジャンルの写真を一人の学生に見せたりして、評価の違いがわかるようにする。写真(絵)は、一度学生の近くでよく見せてから、そのジャンルのものすべてが見える様に並べておくとよい。

(以上、深田嘉昭担当)

## 7. N は V ます (L5)

第5課で動詞のマス形とその否定形が初めて導入される。動詞は「勉強します・散歩します・遊びます・疲れます・休みます (rest)」等。未来を表す用法と反復や習慣を表す用法を練習する。両者の区別をはっきりさせるには「あした・こんばん」「いつも・まいあさ」等の副詞と共に練習するとよい。

(練習方法 1) カルタ

動詞の意味を確認するドリル。ばらばらに並べてある動詞の絵パネルの中から、教師の言った動詞を競争で取る。例文を作らせてもよい。最も多く取った者が勝ち。学生数が多ければチームから交代で選手をださせる。おてつきの罰則などを工夫するとおもしろい。他の品詞でも意味確認のドリルとして応用できる。

(練習方法 2) 連想ゲーム

動詞は限定してあらかじめ提示しておく。そして、教師はその動詞を連想するような絵を見せたり、言葉を言ったりする。学生はそれをヒントにして動詞を当てる。ヒントと動詞を結び付けて作文をさせてもよい。

例 T 「教室」

S 「勉強します」「私たちは教室で勉強します。」(「で」が導入済みの場合)

(練習方法 3) QA ドリル

「はい / いいえ」を使って質問に答えるドリル。

授業の時間割りを書いた表や予定表などを使う。

例 T (授業時間を指しながら)「九時半です。勉強しますか。」

S 「はい、勉強します。」

T 「夏休みです。学校へ来ますか。」(「～へ来ます」が導入済みの場合)

S 「いいえ、来ません。」

名詞の同定文に対しては、「はい、そうです」を用いて答えることができたが、動詞の場合は動詞を繰り返さなければならない。質問が教師の側にかたよらないように、学生の質問の機会も増やす。

## 8. N<sub>1</sub> は N<sub>2</sub> へ/に V ます (L5)

移動動詞と方向を表す「へ/に」のドリル。動詞は「行きます・来ます・帰ります」など。

(練習方法 1)

状況をバス停や駅のホームに設定し、自分が乗ろうとしている乗り物が自分の目的地に行くかどうかを確認する。

例 客<sub>1</sub> 「すみません。このバスは新宿へ行きますか。」

客<sub>2</sub> 「ええ、行きますよ。」

(練習方法 2)

学生に電車や飛行機などの時刻表を簡略化したものを配り、質問する。

例 T 「九時の新幹線はどこへ行きますか。」

S 「京都へ行きます。」

T 「十時の新幹線は大阪へ行きますか。」

S 「はい、行きます。」

質問のしかたに慣れたら学生どうしでチェーン・ドリル。

(練習方法 3) すごろく

盤には地名や建物名などを記入しておく。(例; 銀行, 病院, 韓国) さいころを振ったら、「～へ行きます」と言っ、駒を進める。交通事故の絵があるますには「事故です。病院へ行きます。」等の指示を記入し、後ろのますにもどらせたりする。

## 9. N<sub>1</sub> は N<sub>2</sub> を V ます (L6)

「テレビを見ます・手紙を書きます」など、他動詞のドリル。係助詞の「も」を用いると格助詞の「を」は落ちる。

(練習方法 1) QA ドリル

「～さんは時々お酒を飲みますか。」

「～さんは毎朝新聞を読みますか。」

「～さんは毎日煙草を吸いますか。」

「～さんは今晚テレビを見ますか。」

「～さんは今晚宿題をしますか。」

慣れたら、チェーン・ドリル。

(練習方法 2) 予定表作り

明日の予定や毎日の習慣的行為を列挙させる。S<sub>1</sub> が言ったことについて教師が質問し、S<sub>2</sub> にも言わせる。

(練習方法 3)

「～てください」が導入済みなら、色々な動作をさせることができる。

例 T 「チョークを持ってください。」

S 「はい、チョークを持ちます。」(実際に持つ。以下同じ。)

T 「(黒版に)『あ』と『い』を書いてください。」

S 「はい、『あ』と『い』を書きます。」

T 「『あ』を消してください。」

S 「はい、『あ』を消します。」

T 「『い』も消してください。」

S 「はい、『い』も消します。」など

## 10. N<sub>1</sub> は N<sub>2</sub> で N<sub>3</sub> を V ます (L7)

動作の行われる場所、範囲は、「で」で限定する。

(練習方法 1)

場所を指定して動作をさせる。

例 こまを用意して、いろいろな場所で回させる。

T 「机の上」

S 「机の上でこまを回します。」と言ってから回す。

動作がジャンプであることを例示してから

T 「S<sub>1</sub>さんの隣」

S 「S<sub>1</sub>さんの隣でジャンプします。」と言って、隣に行き、ジャンプ。

係助詞の「も」は「で」の後ろに付く。

T 「S<sub>2</sub>さんの隣」

S 「S<sub>2</sub>さんの隣でもジャンプします。」

## 11. 日付, 曜日 (L7)

「ついたち」から「とおか」と「じゅうよっか」「にじゅうよっか」「はつか」、また、曜日名など、たくさん覚えなければならないから、毎日授業の始めに練習したほうがよい。

### (練習方法 1)

授業の始めに質問する。

「今日は何日ですか。」

「今日は何曜日ですか。」

「昨日は何曜日でしたか。」など。

### (練習方法 2)

カレンダーを用意する。「ついたち」などの音声と具体的な意味との結合が自動習慣化するようにしたい。

例 1 教師が日付や曜日を言い、学生が指し示すドリル。教師が「日曜日」と言ったら学生はカレンダーの日曜日を指す。

例 2 教師がある日付や曜日を指して、「何日(何曜日)ですか。」と質問する。学生はそれに答える。学生どうしてもやらせる。

例 3 教師が「十月三日は何曜日ですか。」「来週の月曜日は何日ですか。」  
「一日が月曜日です。何月ですか。」などと質問して、学生が答える。  
慣れたら、学生から教師へ、次に学生どうして質問させる。

(以上、竹内信人担当)

## 12. N<sub>1</sub> は N<sub>2</sub> (場所) にあります (L8)

教室の中の物を使って練習すると、本や鉛筆や机など、限られた物に終始しがちなので、なるべく教室の外の場面を与えるようにする。

### (練習方法 1) 留守番

はじめに、T が家事をあまりしたことのない夫になり、長時間家をあける妻 (S) にいろいろな物の所在を尋ねる。この際、夫は缶きりや栓抜きはもちろん靴下の場所もわからないような夫であることを強調したほうがよい。つぎに、S 同士に夫と妻のロールプレイをさせる。(ただし、夫と妻の会話で、ます形を使う不自然さは免れないが。)

例 T 「ビールはどこにありますか。」

S 「ビールは冷蔵庫の中にあります。」

T 「栓抜きはどこにありますか。」

S 「栓抜きは食器だなの中にあります。」

T 「コップはどこにありますか。」

これの応用として T がベビーシッターになり、赤ちゃん(子供)の親になった S に、外出先の電話番号のメモやミルクや絵本がどこにあるか尋ねる場面が考えられる。

例 T 「ミルクはどこにありますか。」

S 「ミルクはテーブルの上にあります。」

T 「おむつはどこにありますか。」

S 「ベッドの横にあります。」

### (練習方法 2) アパートさがし

T が不動産屋になる。S がアパートのことをいろいろ尋ねる。

例 T 「これは八万円のアパートです。大学の近くに 있습니다。」

S 「ちょっと高いですね。安いアパートはありませんか。」

T 「あります。これは四万円です。でも風呂はありません。」

S 「そのアパートはどこにありますか。」

風呂やトイレのことや、アパートの近くにスーパーがあるかどうかを尋ねたり、隣に音学大の学生がいるかどうか等尋ねさせるとよい。

(練習方法 3) デパートの案内嬢

T が買物客になり、S の案内嬢に売り場を尋ねる。

例 T 「すみませんが、食器売り場はどこにありますか。」

S 「六階、エスカレーターの前にあります。」

T 「あ、それから、文房具売り場はどこですか。」

S 「七階、おもちゃ売り場の横にあります。」

(練習方法 4) おばあちゃんのめがねさがし

針が自由に動かせる時計を用意する。適当な時間に針をセットする。それから T がおばあさんになり、S 一人ずつにめがねがどこにあるか尋ねる。実際にめがねを用意して、机や本の上に置いたりしてもよい。しかし教室の外の場面を与えるためには、ミニチュアの家具(たんすやベッドなど教室にないもの)を使ったほうがよい。S が代わる度に置き場所を変えるのは言うまでもない。

例 T 「(時計の針がよく見えないふりをしながら) S<sub>1</sub> さん、わたしのめがねはどこにありますか。」

S<sub>1</sub> 「おばあちゃんのめがねはテーブルの上にあります。」

T 「(めがねをかけてから時計を見る)ああ、一時ですね。」

次に、めがねの場所を移し、時計の針を少し動かし、S<sub>2</sub> 以下に上記の練習を繰り返す。

### 13. N<sub>1</sub> は N<sub>2</sub> (場所)にいます (L8)

教室の中では、「S<sub>1</sub> は S<sub>2</sub> の前にいます」位の練習しかできないので 12 と同様なるべく教室の外に出るようにする。この文型の前に時間を表す言葉をもってくと、自然な練習がしやすくなる。

(練習方法 1) V.I.P のスケジュール

はじめに T が S のその日のスケジュールを聞いてもよい。しかし、図書館、家、学校等、限られた返事しか期待できない。教室の外に出るとい

う意味で、変化のあるスケジュールを S に与えたい。そこで、政府の要人、大会社の社長などのスケジュール表を用意し、T が新聞記者になり、V.I.P の秘書の S にスケジュールを尋ねる。

例 T 「明日の午後、鈴木さんは事務所にいますか。」

S 「(スケジュール表を見ながら)いいえ、フランスにいます。」

T 「では来週の月曜日、鈴木さんはどこにいますか。」

S 「アメリカにいます。」

(練習方法 2) おいかけっこ

S 同士にデイトの申し込みをさせる。ただし、S<sub>1</sub> は S<sub>2</sub> が好きだが、S<sub>2</sub> は S<sub>1</sub> からなんとかして逃げようとしている状況を S に説明しておかなければならない。

例 S<sub>1</sub> 「日曜の午後、S<sub>2</sub>さんは家にいますか。」

S<sub>2</sub> 「いいえ、いません。」

S<sub>1</sub> 「そうですか。今晚、家にいますか。」

S<sub>2</sub> 「いいえ、いません。」

(練習方法 3) バラバラ大家族

お父さんが単身赴任、お兄さんが海外出張、お姉さんが結婚、弟が入院、本人が下宿、家に残っているのはお母さん一人という家族の設定を S に説明し、T が家族について質問する。

例 T 「お父さんはどこにいますか。」

S 「父は大阪にいます。」

(練習方法 4) 御一行さま

T が団体旅行の旗を持ってツアーコンダクターになる。S を数人、教室の前に立たせ、そのグループを連れて、「あれは東京タワーです。」などと言いながら観光案内をする。途中、二十分の自由時間を与える。といっても実際にはすぐ笛を吹いて集合させ点呼する。グループ全員の名前を呼んだ後、このツアーに参加していない S の名前を呼ぶ。

例 T 「S<sub>1</sub>さん、いますか。」

S<sub>1</sub> 「はい、います。」  
 T 「S<sub>2</sub> さん、いますか。」  
 S<sub>2</sub> 「はい、います。」  
 T 「S<sub>3</sub> さん、いますか。」  
 S<sub>3</sub> 「はい、います。」  
 T 「S<sub>0</sub> さん、いますか。」  
 ……………  
 T 「S<sub>1</sub> さん、S<sub>0</sub> さんはいませんか。」  
 S<sub>1</sub> 「はい、いません。」  
 T 「S<sub>0</sub> さんはどこにいますか。」  
 S<sub>1</sub> 「S<sub>0</sub> さんはみやげもの屋の前にはいます。」

勘のいい S の場合は上記の展開が期待できるが、そうでない場合は S<sub>0</sub> さんが座っている席から返事をしてしまう恐れもある。そうならないために、「自由時間」の間にグループの一人を自分の席に戻してしまう方法もある。S<sub>0</sub> の代わりに架空の人物の名前を呼んでもよい。

(練習方法 5) かくれんぼごっこ

幼児の絵本などに使われているしかけ絵(図 1 参照)を使ってかくれんぼごっこをする。T が自動車、押し入れ、エレベーターなどの絵(各二枚ずつ)を持ち、子供がどこに隠れているかを S に当てさせる。

例 T 「(絵を見せながら)子供はどこにいますか。」  
 S 「子供は自動車の中にいます。」  
 T 「(絵の中から自動車の絵を二枚取り出し S にどちらか一枚を引き抜かせながら)子供は自動車の中にいますか。」  
 S 「(引き抜いた絵を見ながら)あ、子供は自動車の中にはいません。」

14. N<sub>1</sub> (場所)に N<sub>2</sub> があります (L9)

がいます (L9)

12, 13 で「は」、ここで「が」が出てくるわけだが、この段階での混乱はあまり見られない。単独ではなく、二つ同時に積極的に使い分けられる



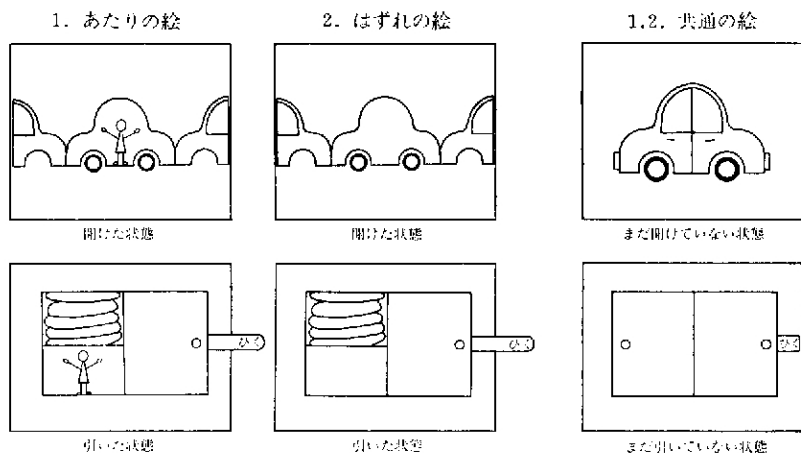


図 1

ような場面を与えていきたい。

(練習方法 1) 怪盗ルパン vs. ホームズ

まず、大富豪の邸の見取り図を用意する。黒板に張って、みんなに見えるようにする。T がルパンになり、邸の下見をしてきた S が図を見ながら報告をする。12 や 13 の練習も同時にできる。ルパンは紳士なので、ます形を使うことに不自然な感じはない。

例 T 「ダイヤモンドはどこにありますか。」

S 「ダイヤモンドは奥さんの部屋の中にあります。部屋の前には犬がいます。」

T 「奥さんの部屋はどこにありますか。」

S 「二階にあります。(図を示しながら)ここに山の絵があります。」

T 「山の絵のうしろになにかありますか。」

S 「はい、その金庫の中にダイヤモンドがあります。」

次に、ルパンからの手紙を見せる。「〇月〇日ダイヤモンドをいただく。ルパン」そこでホームズ登場となる。S<sub>1</sub> が大富豪に、S<sub>2</sub> がホームズにな

り、上記のような練習をする。ホームズにはダイヤモンド以外にもどの部屋に誰がいるかなどいろいろ質問させる。細かいことを見逃してはホームズらしくないので。

(練習方法 2) てんぐのめがね

ノートをまるめたりラップフィルムの芯などでつくった「てんぐのめがね」を用意する。遠くの物がよく見えることを説明する。それから「てんぐのめがね」を S に渡し質問する。自由に答えさせる場合と答えを予め用意しておく場合が考えられる。後者の場合は、絵または写真(スライドでもよい)を「てんぐのめがね」の前方に差し込み、それについて答えさせる。

例 T 「高田馬場の駅のホーム(の上)に誰かいますか。」

S 「はいホームに〇〇さんがいます。」

T 「〇〇さんの前に女の人がありますか。」

S 「いいえ、〇〇さんの後ろに女の人があります。」

(練習方法 3) 豪邸拝見

ミニチュアの家具を使って、S にピアノ、ダンスなど自由に配置させ、家の中を案内させる。S の部屋の様子を尋ねても、机、本棚など大体決まってしまうので、なるべく冷蔵庫、テーブル、長いす、食器棚など普通の家にあって教室にはないものを使わせる。

例 S 「テーブルの後ろに冷蔵庫があります。」

S 「二階にベッドルームが五つあります。」

S 「リビングルームにピアノがあります。」

15. N (場所)になにかありますか (L9)

誰かいますか (L9)

机をはさんで向かい合った T と S が「机の上になにかありますか。」と言うのは不自然なので、なるべく見えない状況にしたり電話を使ったりするようにする。

(練習方法 1) 目隠しゲーム(変形すいか割り)

手ぬぐいを一本用意する。机やいすを教室の後ろに片づけ、動けるスペースを確保する。手ぬぐいで目隠しをした S<sub>1</sub> とゴールの間に障害物としているいろいろな物を並べる。S<sub>1</sub> は他の S に聞きながらゴールをめざす。物の代わりに人が並んでもよい。

例 S<sub>1</sub> 「ここに何かありますか。」

S 「はい、先生のかばんがあります。」

S<sub>1</sub> 「先生のかばんのそばに何かありますか。」

S 「はい、先生のかばんのそばにかさがあります。」

例 S<sub>1</sub> 「わたしの前に誰かいますか。」

S 「はい、先生がいます。」

S<sub>1</sub> 「先生のとりに誰かいますか。」

S 「いいえ、誰もいません。」

### (練習方法 2) レスキュー隊

事故や災害で現場に向かったレスキュー隊員と、無線で連絡をとる本部との会話。またはヘリコプターから実況放送するアナウンサーとスタジオにいるニュースキャスターでもよい。どんな事故や災害かは T が写真や絵を用意してもよいし、S の想像にまかせてもよい。

例 S<sub>1</sub> 「こちら現場です。川のそばに飛行機があります。」

S<sub>2</sub> 「飛行機のそばに誰かいますか。」

S<sub>1</sub> 「いいえ。誰もいません。」

S<sub>2</sub> 「飛行機のそばに何かありますか。」

### (練習方法 3) 宅配便

荷物の届け先の家の都合を電話で聞く。T が宅配便の会社の人になり、S の家に電話する。

T 「もしもし、S さんのお宅ですか。お届け物があります。あすの午後誰か家にいますか。」

S 「何時ごろですか。」

T 「ちょっとわからないんですが。」

S 「あさっては一日中わたしが家にいます。」

T 「では、あさって。」

(以上、星崎幸子担当)

#### 16. 「どういたしまして。」 (L10)

a 相手の要求に答える行為をしてあげた時、相手の感謝のことばに対して返す表現

例 T 「今、何時ですか。」

S 「9時ちょっと前ですね。」

T 「ありがとうございます。」

S 「どういたしまして。」

(練習方法)

時刻表を使って練習をする。その際、おもちゃの時計を用意して、時刻を操作できるとなお良い。

例 S<sub>1</sub> 「次の電車は何時ですか。」

S<sub>2</sub> 「今、11時ですから、11時5分です。」

S<sub>1</sub> 「ありがとうございます。」

S<sub>2</sub> 「どういたしまして。」

b こちら側から、何らかの親切な行為をしてあげた時、相手の感謝のことばに対して返す表現。

例 相手に席をすすめる

T 「どうぞ。」

S 「どうも、すみません。」

T 「どういたしまして。」

(練習方法)

教室内で、学習者に対し不都合な状況を作る。

例 暗い → カーテンをあける

暑い → 窓をあける

教師は、「暑い」とキューを出す。S<sub>1</sub>は、窓をあける。S<sub>1</sub>とS<sub>2</sub>の間で、

上の例のような会話練習をする。以下同様にして、キューを出す。

### 17. 「こちらこそ。」 (L10)

相手の感謝に対する場合と陳謝に対する場合とを下のような例を用いて練習させる。

(練習方法)

例 1 バス停で (S<sub>1</sub>: バスを待っている)

(S<sub>2</sub>: S<sub>1</sub> の後ろにならぶ)

S<sub>1</sub> 「今、何時ですか。」

S<sub>2</sub> 「9時ちょっと前です。あのう、次のバスは何時ですか。」

S<sub>1</sub> 「9時ちょうどです。」

S<sub>2</sub> 「ああ、そうですか。どうも。」

S<sub>1</sub> 「こちらこそ。」

例 2 電車の中で隣りの人と体がぶつかる。

S<sub>1</sub> 「すみません。」

S<sub>2</sub> 「こちらこそ。」

### 18. 「(いいえ) とんでもない。」 (L10)

自分の事、自分の物について指摘された時、謙遜の気持ちを込めて、相手の指摘に異論を唱える表現。

例 T 「この時計いいですね。高かったでしょう。」

S 「いいえ、とんでもない。」

(練習方法)

「時計」「靴」「かばん」と、品物を換えて、学習者どうしほめ合う。

例 T 「誰が、このクラスで一番ハンサムですか。」

S<sub>1</sub> 「S<sub>2</sub> さんです。」

S<sub>2</sub> 「いいえ、とんでもない。S<sub>3</sub> さんですよ。」

S<sub>3</sub> 「いいえ、とんでもない。S<sub>4</sub> さんですよ。」

以下、チェーンドリルで続ける。「かわいい」「頭がいい」「美人だ」「勉強熱心だ」「まじめだ」などの Aj・AjN をキューとして、教師が提示し

て続けていく。

### 19. 「(どなたか)をお願いします。」 (L10)

特定の個人にではなく、全体にむかって呼びかけ依頼する表現。

(練習方法)

教師は、状況のキューを出す。

例 けが→バンドエイド, 119番, 包帯...

パーティー→飲みもの, おかし...

修学旅行→トランプ, カメラ...

教師が提示したキューに対して、その際に必要なものを挙げさせる。

(注) この依頼表現に対しては、「私がします。」「○○さんをお願いします。」などの答えが考えられる。

### 20. 「A ですか, B ですか。」 (L10)

相手の求めに対して、二者択一の形で相手に示し、選択をうながす表現。

(注) A, B は共通の属性を備えていなければならない。(共通の属性とは、例えば、「コーヒーですか, 紅茶ですか。」の場合の“同じ飲みもの”のような条件のことをいう。つまり、「コーヒーですか, 鉛筆ですか。」などの表現は、ごく特殊な場合を除いては、使うことができない。)

例 ファミリーレストランで

店員 「お飲みものは、コーヒーですか, オレンジジュースですか。」

客 「コーヒーをお願いします。」

店員 「ライスですか, パンですか。」

客 「パンを下さい。」

店員 「ドレッシングは、何になさいますか。」

客 「えーと、何があるんですか。」

店員 「和風, 中華風, サザンアイランドとございますが。」

客 「和風をお願いします。」

(練習方法)

モンタージュゲーム。クラスの中で、一人以外は、犯人がわかってい

る。そこで、そのわからない人は、二者択一の形で質問しながら、絞り込んでいく。

例 S<sub>1</sub> 「その人は、男ですか、女ですか。」

S 「男です。」

S<sub>1</sub> 「その人は、背が高いですか、高くありませんか。」

S 「高いです。」

：

この他、世界地図を使って国名をあてさせる、「スミスさんの荷物はどれか」などといった所有者探しをする、等同様に練習できる。

(注) 「A ですか、B ですか。」の質問に対しては、「A をお願いします。」と、「A です。」の二通りの答え方が考えられる。

## 21. 「いいえ、けっこうです。」 (L10)

相手の親切な提案に対して、断わりの気持ちを伝える表現。

(注) 友人関係でこの表現を用いると、冷淡な感じがするように、発音のしかたによっては、相手に対して失礼な表現になりかねないことに注意させる。

「いっしょに帰りませんか。」などの勧誘の文にこの答えを用いると、かなり強い拒絶となる。むしろ、やりもらい表現の答えとして用いることが多い。

例 ファミリーレストランで

店員 「コーヒーのお代わりは、いかがですか。」

客 「いいえ、もうけっこうです。」

(参考) 「いいえ」の答えに対して、「はい」の答えには、「(ぜひ)お願いします。」などと相手を促す場合が考えられる。

ファミリーレストランで、ウェイトレスがコーヒーのお代わりを尋ねに来る。

店員 「コーヒーのお代わりはいかがですか」

客 「はい、お願いします。」

### (練習方法)

店員と客でのロールプレイ。何とか買ってもらいたい店員と、あまり気の進まない客。

例 店員 「お飲みものはいかがですか。」

客 「けっこうです。」

店員 「では、アイスクリームはいかがですか。」  
などと、メニューを見ながら、やりとりを進める。

## 22. 一つ、二つ... (序数詞)

物の数量を数える時に用いる表現。疑問詞は「いくつ」で表現する。

例 ファーストフードのお店で

客 「ハンバーガーを3つと、コーラを4つ、ポテトを2つください。」

店員 「はい、ハンバーガーを3つと、コーラを4つ それと、ポテトを2つですね。少々、お待ち下さい。」

(練習方法 1)

店員と客のロールプレイで、数の把握の練習をさせる。

(練習方法 2)

ゲーム、双六、ルーレットを使って、数に慣れさせる。

## 23. $N_1$ が $N_2$ に $V$ ました (L11)

(練習方法)

短かい時間、視聴覚教材を学習者に見せ、学習者はその内容を記憶するように努める。

例 T 「花はどこにありましたか。」

S<sub>1</sub> 「花は、机の上にありました。」

T 「本は」

S<sub>2</sub> 「机の下にありました。」

以下同様に続けていく。

(以上、小野正樹担当)

## 24. $A_j$ たです

$A_jN$  でした (L12)

$A_j$  の過去形及び過去否定形。この課で  $A_j$  の場合は「～たです。/～くありませんでした。/～くなかったです。」と全て導入するが、 $A_jN$  の場合は「～でした。/～ではありませんでした。/～じゃなかったです。」ま



でに止め、「～だったです。」は導入しない。尚ただ単に Aj だけでなく、口頭練習の時から、副詞を組み込ませた方が実践的である。Aj では、さほど問題はないが、AjN の時、学生の頭の中に常に AjN では“ナ”を忘れないようにという思いこみがあるため、何でも“ナ”をつけるくせが直らない学生がいるので注意したい。これを避けるうえでも副詞と共に使うとよいと思われる。

#### (練習方法 1) 5 年前そして今

絵パネルを作り表、裏にそれぞれ 5 年前、今の絵を描く。

同様に L12 の語彙の中では次のものがパネル化できる。「安い、高い、大きい、小さい、広い、せまい、新しい、古い。」ここで難点となるものが AjN である。ベッドに寝ている絵と元気になっている絵を描き、「今は元気ですが 5 年前は病気でした。」というのは描いて描けないことはないがあまりよい例ではない。

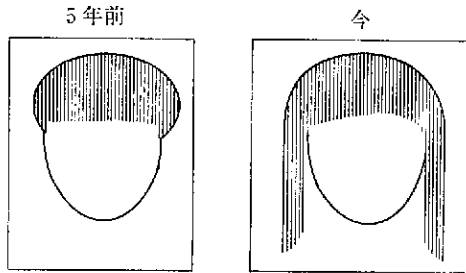
#### (練習方法 2) 1 枚の写真

教室に写真を 1 枚用意する。できるだけ人物が写っているものがよい。全員に回覧後、質問する。

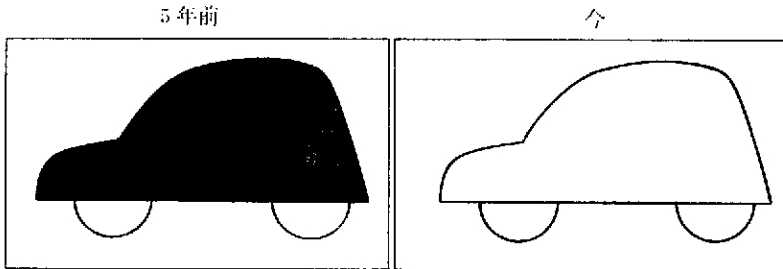
1. どんな写真でしたか。
2. その教室はきれいでしたか。
3. 机の上に何がありましたか。
4. テープレューダーの色はどうでしたか。
5. みんな背が高かったですか。

#### (練習方法 3) ゲーム；モンタージュ写真

1. 人物写真を数枚用意する。
2. 人数の大小により A, B, C とチームを作る。
3. 各チームから 1 人、代表者を黒板の前に出す。
4. 残ったチームのメンバーで写真を 1 枚選び、姿、形をよく観察し、次々に代表者に注文をつける。
5. 代表者は言われたとおりに黒板に書いていき、後で A, B, C の



T 「〇〇さんは、今かみのけが長いです。  
5年前は。」  
S 「みじかかったです。」



T 「〇〇さんの車は今、白いです。  
5年前は。」  
S 「黒かったです。」

グループで比較する。

例 顔を描きます。目は大きかったです。鼻は丸かったです。セーターを描きます。セーターは白かったです。スカートを描きます。もう少し短かったです。色は黒かったです。くつを描きます。くつはハイヒールでした。くつは赤かったです。

## 25. もう、まだ (L12)

動作・作用が完了したことを認識させるために(練習 1)の方法を行なう。  
(練習方法 1)



日本語の授業の開始と終了を言わせる。例えば、9時から10時30分までとする。

{ 8時55分：授業はまだ始まりません。

{ 9時5分：授業はもう始めました。

{ 10時25分：授業はまだ終わりません。

{ 10時35分：授業はもう終わりました。

この概念がつかめたら、次は学生の身近な話題をとりあげて質問していく。

- 例 ① △△のレポートは、もう出しましたか。  
② アルバイトは、もう見つかりましたか。  
③ 下宿のお婆さんは、もう旅行から帰りましたか。  
④ パーティの準備は、もうできましたか。

5人ぐらいの学生に質問したら、学生も要領がわかるので、あとは学生同士でやらせる。この方が、お互いの事情がわかっているのでおもしろい質問が出て、場が盛り上がる。

## 26. まだ A/N/V ですか

〈Aj〉 △さんのお子さんは、まだ小さいですか。

あの町は、まだきたないですか。

そのかばんは、まだ新しいですか。

ニューヨークは、まだ寒いですか。

この部屋は、まだ暑いですか。

〈AjN〉 あのあたりは、まだ静かですか。

あの方は、まだきれいですか。

〈N〉 △さんは、まだ学生ですか。

△さんは、まだ独身ですか。

〈V〉 △さんは、まだいますか。

この料理は、まだ食べますか。

この新聞は、まだ読みますか。

テレビは、まだ見ますか。

これらの文例を見てもわかるとおり、25とは違って本項の「もう」、「まだ」の場合は、使われ方がかなり限定される。また、25では文例の説明は必要ないが、本項は人によっては内容の理解が不十分で説明が必要となる場合もでてくる。尚、Ajの場合、「まだ」と「もう」の境目がはっきりせず、話し手の主観によるところが大きいため、この点に注意したい。

(注) 「まだ」の使えない Aj (=状況が変化しない)

×まだ うれしい

×まだ ていねい

×まだ 楽しい

#### (練習方法 1)

① 学生に聞かせるテープの速度を通常より速くする。

S 「先生、(テープが)速いです。」

(教師：スピードをゆるめながら)

T 「どうですか。」

S 「まだ速いです。」

(教師：スピードをさらにゆるめながら)

T 「まだ速いですか。」

S 「ちょうどいいです。」

② シャワーの水温が低く、手元に温度調節装置がないため、第三者に依頼する。

私 「おかあさーん。悪いけどちょっとシャワーの温度上げて。」

母 「(温度を上げながら) どう。」

私 「まだあ。」

母 「(さらに上げながら) まだ冷たい。」

私 「もう少し。あつ。ダメダメ。あつすぎる。」

母 「うるさいわねえ。(温度を少し下げながら) 今度はどう。」

私 「いいよ。ありがとう。」

③ 寒い寒い。

S 「先生寒いです。」

T (窓をしめながら) 「まだ寒いですか。」

S 「ええ。」

T (セーターをかす) 「どうですか。」

S 「ちょうどいいです。」

T (しばらくたって聞く) 「どう。」

S 「もう、あたたかいです。」

—寒い  
—まだ寒い  
—ちょうどいい  
—もう、あたたかい

(注) Aj の + と - について。

Aj に「まだ」をつけると、それぞれ+と-の意味あいをもつ文となる。

1. まだ明るいです。

(+) まだ明るいから野球は OK。

(-) まだ明るいから花火はダメ。

2. まだ小さいです。

(+) 子供がまだ小さいから、お金がかからない。

(-) 子供がまだ小さいから、仕事をしたくてもできない。

(練習方法 2)

① S<sub>1</sub> はパーティーに招待されたが、自分一人だけ行けなかった。次の日にパーティーの様子を S<sub>2</sub> に聞く。

Aj の過去形、「まだ」を使用。

パーティーに自分だけ行けなかった。

S<sub>1</sub> 「きのうのパーティーはどうでしたか。」

S<sub>2</sub> 「いやあ、とても楽しかったですよ。料理もたくさんありました。」

S<sub>1</sub> 「ああ、そうですか。何人ぐらい集まりましたか。」

S<sub>2</sub> 「そうですねえ。10人ぐらいです。」

S<sub>1</sub> 「わあ、たくさん集まりましたね。料理は何がおいしかったですか。」

S<sub>2</sub> 「ぜんぶおいしかったですよ。私はシチューが一番好きでした。」

S<sub>1</sub> 「そうですか。よかったですね。サムさんのアパートは、どんなお部屋でしたか。」

S<sub>2</sub> 「広かったですよ。そしてきれいでした。れいぞうこもテレビもありました。」

S<sub>1</sub> 「S<sub>2</sub> さんのお部屋にはテレビがありますか。」

S<sub>2</sub> 「いいえ、まだです。S<sub>1</sub> さんは。」

S<sub>1</sub> 「私もまだです。」

② 4コマまんがの要領で短い会話例。

全員(10人)で、これから出かけようとする場面。

みんなで10人。

T 「サムさん、これでもう全員(みんな)きましたか。」

S<sub>1</sub> 「ちょっとまって。1人、2人、3人...9人。まだ1人いません。」

T 「だれですか。」

S<sub>1</sub> 「ええっと。」

S<sub>2</sub> 「チンさんがまだです。」

L12でAjの過去形が導入されたため、会話①、②も応用編として、

もっとくだけた文調にもできる。

## 27. A から B まで (L13)

幅の感覚を持たせるために、分かりやすく図式化する。そのために、1日のスケジュール表、電車、バス等の料金表を参考にする。

(練習方法 1)

① 1日のスケジュールを書かせる。

7時に起きました。

9時から4時まで大学にいました。

12時から1時まで昼休みでした。

5時から7時まで図書館で勉強しました。

10時におふろへ行きました。

1時から7時まで寝ました。

最初は1文ずつの作文とし、「て形」導入後は「て形」を用いて長文に広げていく。

S<sub>1</sub> 「きのうは何時に起きて、朝ごはんを食べましたか。」

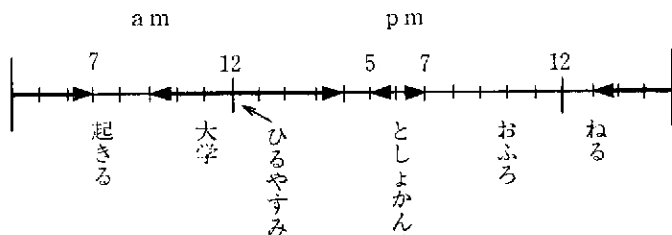
S<sub>2</sub> 「7時に起きて、7時半頃に朝ごはんを食べました。」

S<sub>1</sub> 「きのう大学から、すぐ家へ帰りましたか。」

S<sub>2</sub> 「いいえ、4時に大学を出て、図書館へ行きました。それから図書館で5時から7時まで勉強していました。」

S<sub>1</sub> 「12時から1時まで、昼休みですね。きのうは何をしましたか。」

S<sub>2</sub> 「大学の学生食堂で定食を食べて、友達とキャッチボールをしま



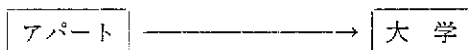
した。」

② 電車の料金表(次頁参照)

S<sub>1</sub> 「渋谷から目白までいくらですか。」

S<sub>2</sub> 「160円です。」

28. どうやって V ますか (L13)

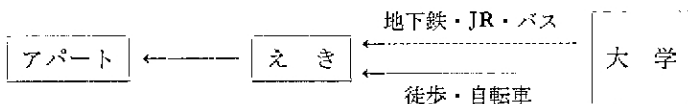


T 「チンさんは、どうやって[大学]へ[いきます]か。」

S 「私は JR によって大学へ行きます。」

[ ] の部分は、L13 に出ている語彙をいろいろと変えて使う。

尚、最初は文型(～て)になれる意味からも1文のみとし、次の段階で2文、3文と続けるように指導する。このとき、接続詞「それから」も入れるようにすると便利である。



T 「チンさんは[大学]から[アパート]まで、どうやって帰りますか。」

S 「私はいつも5時頃大学を出て、地下鉄によって中野駅まで行きます。それから、スーパーで買い物をして帰ります。」

これらの練習がひととおりできるようになったら、「毎日、毎朝、毎晩、いつも、ときどき、きょう、きのう」等を入れて文を作らせる。

<応用編>

いままで見たことのないもの、珍しいものを前にして、聞く場合。できたら絵を入れた方がよい。

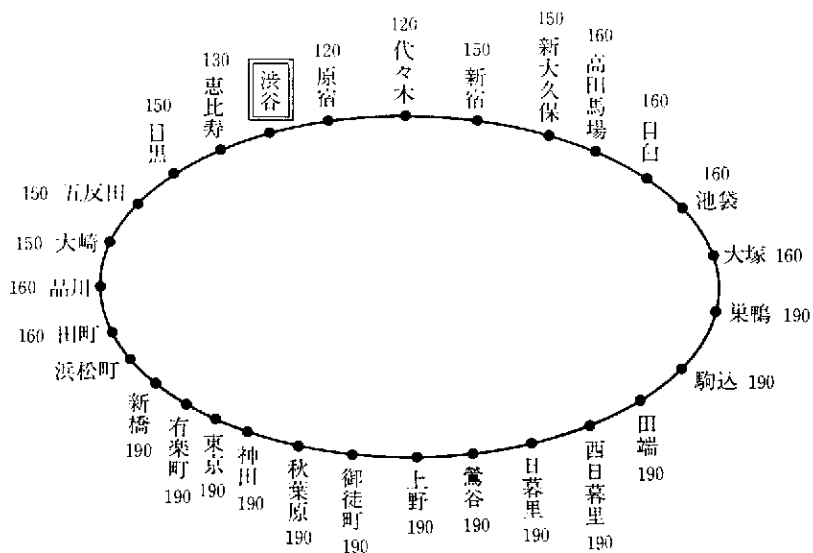
- アーティチョーク / レイシ / 北京ダック / 丸ごとの魚;

どうやって\_\_\_\_\_ますか。(食べ)

- タビ;

どうやって\_\_\_\_\_ますか。(はき)





- 着物 / サリー；  
どうやって\_\_\_\_\_ますか。 (き)
- 太巻 / 折り紙の鶴等；  
どうやって\_\_\_\_\_ますか。 (つくり)
- 大きいケーキ；  
どうやって\_\_\_\_\_ますか。 (切り)
- 洗濯物(ユカタ / タビ)；  
どうやって\_\_\_\_\_ますか。 (ほし)
- 外国での電話；  
どうやって\_\_\_\_\_ますか。 (かけ)
- 複雑な機会(パソコン / CD)；  
どうやって\_\_\_\_\_ますか。 (使い)

(以上、久光直子担当)

## 29. V てください

V ないてください

V くださいませんか (L 14)

「V てください」は丁寧表現のように見えても実際には軽い命令となることが多いので、特に学生が使用する場合には注意が必要である。

「V くださいませんか」は丁寧に頼む言い方で、特に自分にできないことを人に頼むような場面で多く用いられる。

(練習方法 1)

① T がある状況を描写した一文を与え、それに関連する軽い命令文を S が作る。

例 1 T 「授業で発表者の声がよく聞き取れません。」

S<sub>1</sub> 「もっと大きな声で話してください。」

S<sub>2</sub> 「もう少しゆっくり話してください。」

S<sub>3</sub> 「はっきり話してください。」

S<sub>4</sub> 「みんな静かにしてください。」

S<sub>5</sub> 「おしゃべりをしないでください。」

のように一つの状況に対して複数の反応を求めてもよいし、

例 2 T 「チーズは 5°C ぐらいの所で保存しなければなりません。」

S<sub>1</sub> 「冷蔵庫に入れてください。」

T 「となりの部屋で赤ちゃんが寝ています。」

S<sub>2</sub> 「大声で話さないでください。」

のように一問一答式にしてもよい。いずれにしても、S がうまく反応できない場合には、T がヒントとなる単語を与えるなどの配慮も必要となる。

例 3 T 「風が強くなってきました。」

S<sub>1</sub> 「……………」

T 「窓を……………」

S<sub>1</sub> 「窓をしめてください。」

② T が設定した状況に基づいて、S が丁寧な依頼文を作る。

例 T 「部屋の中が暗くなってきました。」

S<sub>1</sub> 「電気をつけてくださいませんか。」

T 「駅で、電車の行き先を書いた漢字が読めません。」

S<sub>2</sub> 「すみませんが、この漢字を読んでくださいませんか。」

T 「電話がかかってきましたが、ちょうど料理をしていて手が離せません。」

S<sub>3</sub> 「ちょっと電話に出てくださいませんか。」

### (練習方法 2)

① 病院・市役所・銀行などの窓口で申し込み書を書くという場面を設定し、係員と客の役を割り当てて自由にロールプレイをさせる。その際、「V てください」「V ないでください」をなるべく多く入れるようにする。

例 係 「ここに名前と生年月日を書いてください。」

客 「ああ、ここですね。この下には何を書くんですか。」

係 「そこはこちらで書きますので、何も書かないでください。」

客 「この漢字は何と読みますか。」

係 「『キオウショウ』です。」

客 「あの、よくわからないのですが、何のことだか教えてくださいませんか。」

係 「今までにかかったことのある病気があれば、それをここに書いてください。」

最初に T が簡単なモデルを提示して何度か練習させ、慣れてきたらアドリブで自由に会話できるようにする。

② 工場・寺院などを見学するという場面を設定し、係員が様々な注意をしながら客を案内する様子をロールプレイで行う。係員は「V てください」「V ないでください」を随所に折り込みながら案内する。

例 係 「『立入禁止』の所には入らないでください。」

「私と一緒に歩いてください。」

「写真をとらないでください。」

「機械(展示品)にさわらないでください。」

この場合も最初に T が係員役を演じ、おおよその流れを提示しておいた方がよい。

③ インクをこぼす、物をこわす、といった相手に失礼なことをする場面を設定し、謝罪の言葉に対して「V しないでください」で応答させる。

例 1 S<sub>1</sub> 「申しわけありません。」

S<sub>2</sub> 「いいですよ。気にしないでください。」

このパターンは、相手の気づかいに対する応答という場面でも使える。

例 2 S<sub>1</sub> 「夜遅いですから、送らしましょうか。」

S<sub>2</sub> 「いいえ、大丈夫です。心配なさらないでください。」

### 30. V<sub>1</sub> ないで V<sub>2</sub> (L14)

この文型には次の二つの意味がある。

a) “instead of ~” の意で V<sub>1</sub> と V<sub>2</sub> が両立できない場合。

例 「歩かないでタクシーに乗ります。」

b) “without ~” の意で「V<sub>1</sub> ないで」が V<sub>2</sub> の手段や付帯状況になっている場合。

(練習方法 1)

① a) の練習として、チェンドリルの形を用い、両立しない二つの事項を使って一文を作らせる。V<sub>1</sub> は前の人を作った文の V<sub>2</sub> をそのまま使い、それを「ないで」で否定して新たな V<sub>2</sub> を持ち出す、といった作業の繰り返しになる。

例 T 「日曜日は何をしましたか。」

S<sub>1</sub> 「テレビを見ました。」

S<sub>2</sub> 「テレビを見ないで勉強しました。」

S<sub>3</sub> 「勉強しないでテニスをしました。」

S<sub>4</sub> 「テニスをしないで買物に行きました。」

S<sub>5</sub> 「買物に行かないで家で寝ていました。」

.....  
② b) の練習として、チェーンドリルの形で手段や付帯状況を示す一文を作らせる。前の人が単語を与え、次の人がそれを使って文を作る、といった作業の繰り返しになる。

例 T 「ゆうべは電気を消して寝ましたか。」

S<sub>1</sub> 「いいえ、電気を消さないで寝ました。テレビは?」

S<sub>2</sub> 「あ、テレビも消さないで寝ました。窓は?」

S<sub>3</sub> 「あ、窓も開めないで寝ました。玄関の鍵は?」

S<sub>4</sub> 「あ、玄関の鍵もかけないで寝ました。水道は?」

S<sub>5</sub> 「あ、水道も止めないで寝ました。」  
.....

#### (練習方法 2)

① a) の練習として、実際に何かをやっている場面で、その行為をやめさせて別の行為をさせるように指示する。教室内でできる行為から始め、S にいろいろな行為をさせておき、

例 1 T 「立たないですわってください。」

「英語で言わないで日本語で言ってください。」

のように指示する。次に、S<sub>1</sub> の行為に S<sub>2</sub> が指示を与えるといったように、チェーンドリル式に S 同士で練習をさせる。

慣れてきたら、他の場面を設定してロールプレイをさせるようにする。場面や人物関係によっては、文末に「てください」を用いず、「なさい」「方がいい」「べきだ」などを使う場合もあるので、不自然な表現が出てきたらその都度注意を与える必要がある。

例 2 T が良くない学生の役をして、同級生 S が注意をする場面。

S<sub>1</sub> 「アルバイトばかりしないで、もっと授業に出た方がいいです。」

S<sub>2</sub> 「授業中はよそ見をしないで、きちんと先生の話の聞かなくてはだめです。」

S<sub>3</sub> 「友だちのノートをコピーしないで自分でノートをとるべきで

す。」

例 3 T が子供の役をし、S が母親の立場から注意をする場面。

S<sub>1</sub> 「マンガばかり読まないで、少しは勉強なさい。」

S<sub>2</sub> 「そんなに急がないでゆっくり食べなさい。」

S<sub>3</sub> 「いつまでも寝ていないで、早く起きて顔を洗いなさい。」

〈例 2〉〈例 3〉とも、V<sub>1</sub> の部分は T のゼスチャーを見て言わせ、V<sub>2</sub> の部分は S に自由な発想で発話するようながす。

この練習は、実際に何かをしている場面ではなくても、次のように今後のことについて注意する場面を想定して行うこともできる。

例 4 (母 → 子)

「犬を飼うのなら、毎朝寝坊しないで散歩に連れていかなければいけませんよ。」

(医者 → 患者)

「今日はお風呂に入らないで早く休んでください。」

② b) の練習として、T が前に立って次のような指示を出し、S がその通りに体を動かしてみる。

例 1 T 「右手を上げないで左足を上げてください。」

「左足を下げないで右目をつぶってください。」

やり方がわかったら、S<sub>1</sub> が指示を出しその他の S が動作をするようにさせる。また逆に、S<sub>1</sub> ひとりに動作をさせ、その他の S が順にいろいろな指示を出してみるという方法もある。いずれにしても、スピーディーに行うことで口頭練習の効果を高めたい。手拍子を取るなどしてリズムをつけて行うのもよい。その際には、

例 2 S<sub>1</sub> 「右目、開けないで、左手、曲げて。」

のように「を」「ください」などを省略してリズムに乗りやすくする工夫も必要であろう。

### 31. V ましょう(か) (L14)

この文型には次の二つの意味がある。

- a) 話し手が何らかの行為を行い、それを相手に提供する場合。
- b) 話し手が、相手にもある行為を行うよう勧誘する場合。

次の場面練習によって a)・b) の違いに習熟させた上で、似たような場面を設定して S 同士で自由な会話ができるよう指導する。

(練習方法)

例 1 S<sub>1</sub> の部屋で S<sub>1</sub> と S<sub>2</sub> が仕事をしている場面。

S<sub>1</sub> 「寒いんですね。窓をしめましましよう<sub>b</sub>。S<sub>2</sub> さんはそちらの窓をしめて  
 くださいませんか。」

S<sub>2</sub> 「はい。」

S<sub>1</sub> 「ストーブをつけましましようか<sub>a</sub>。」

S<sub>2</sub> 「いいえ、だいじょうぶです。」

S<sub>1</sub> 「それじゃ、熱いお茶を入れましましよう<sub>a</sub>。」

S<sub>2</sub> 「ああ、それはいいですね。お願いします。」

.....(間).....

S<sub>1</sub> 「疲れませんか。少し休みましましようか<sub>b</sub>。」

S<sub>2</sub> 「ええ、そうですね。休みましましよう<sub>b</sub>。」

例 2 放課後に S<sub>1</sub> と S<sub>2</sub> が話をして、S<sub>3</sub> を誘う場面。

S<sub>1</sub> 「これからどこかに行きませんか。」

S<sub>2</sub> 「いいですね。どこに行きましょう。」

S<sub>1</sub> 「そうですね... 銀座にしましましようか<sub>b</sub>。」

S<sub>2</sub> 「ああ、久しぶりですね。それじゃ、S<sub>3</sub> さんも誘いましましよう<sub>b</sub>よ。  
 私がちよっと呼んでましましよう<sub>a</sub>。」

.....(間).....

S<sub>1</sub> 「これから一緒に銀座に行きませんか。」

S<sub>3</sub> 「えー、きょうはちよっと...。」

S<sub>1</sub> 「何が用事でもあるんですか。」

S<sub>3</sub> 「いえ、別にそういうわけじゃないんですけど...。」

S<sub>2</sub> 「それならいいじゃない、行きましようよ。どこか素敵なお店で  
おいしいものでも食べましよう。」

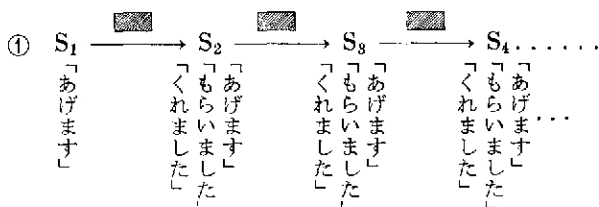
S<sub>3</sub> 「そうですねえ・・・。」

〈例 1〉〈例 2〉共にイントネーションには十分注意が必要である。特に、イントネーションによって提供か勧誘かが決まってしまう場合もあるので、T がいろいろの言い方をして見せて、その違いを S に納得させておくとうい。また、同じ勧誘でも、「V ませんか」は話し手の意志が強く表面化するのに対し、「V ましょうか」は相手の意志をかなり尊重する表現である点なども場面の中でしっかり把握させることが大切である。

### 32. あげる / もらう / くれる (L14)

この表現を指導する際には、「だれがだれにどうする」のかという点と、視点人物が自分側か否かという点を常に明確にしておかなければならない。そのため、この表現の練習も、この二点が明らかである場面を設定して行う必要がある。

(練習方法)



上図のように、実際に S が品物をやりとりしながら、「あげる / もらう / くれる」を使って自ら状況説明を行う。

例 S<sub>1</sub> 「私は S<sub>2</sub> さんにあげます。」

S<sub>2</sub> 「S<sub>1</sub> さんは私にくれました。」

「私は S<sub>1</sub> さんにもらいました。」

「私は S<sub>3</sub> さんにあげます。」

S<sub>3</sub> 「S<sub>2</sub> さんは私にくれました。」

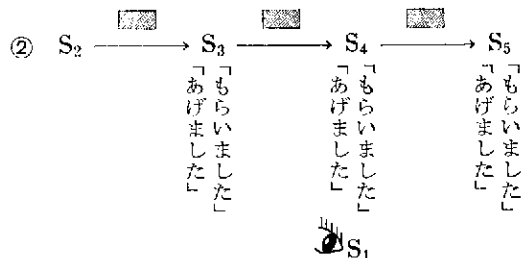


「私は S<sub>2</sub> さんにもらいました。」

「私は S<sub>4</sub> さんにあげます。」

.....

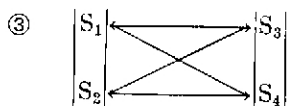
これを S 全員にまわるまで繰り返し言わせ、用法の定着をはかる。



実際に S が品物をやりとりするところは ① と同じだが、品物をやりとりしている S<sub>2</sub> から S<sub>5</sub> は発話せず、それを見ている S<sub>1</sub> だけが第三者としてその状況説明を行う。品物の動きと発話がうまく合うよう工夫する。

- 例 S<sub>1</sub> 「S<sub>2</sub> さんが S<sub>3</sub> さんにあげました。」  
「S<sub>3</sub> さんが S<sub>2</sub> さんにもらいました。」  
「S<sub>3</sub> さんが S<sub>4</sub> さんにあげました。」  
「S<sub>4</sub> さんが S<sub>3</sub> さんにもらいました。」  
「S<sub>4</sub> さんが S<sub>5</sub> さんにあげました。」  
「S<sub>5</sub> さんが S<sub>4</sub> さんにもらいました。」

この場合、第三者の観察という設定のため、① と違って「あげます」は使えず「あげました」となる点、「くれました」は話し手が品物を受け取る側の人間にならない限り使えないためここでは言えないという点をきちんとおさえ、指導することが肝要である。ここで、自分側か否かによって「くれる」の使用に制限があることを理解させた上で、第三者が当事者に向かって「くれるな」「くれないでください」などとは言えないことにも触れておくとよい。



$S_1$  と  $S_2$ ,  $S_3$  と  $S_4$  が組になって実際に品物をやりとりしながら状況説明をする。ここで注意すべき点は、 $S_1$  と  $S_2$ ,  $S_3$  と  $S_4$  をそれぞれ身内(自分側の人間)と考えるため、その身内が品物を受け取った場合にも「くれる」を使うことができるという点である。

例  $S_1$  「 $S_3$  さんが  $S_2$  にくれました。」

$S_3$  「 $S_2$  さんが  $S_4$  にくれました。」

この場合、身内の人間には「さん」をつけないことにも注意しておきたい。

### 33. $N_1$ は A で、 $N_2$ は B です

$N$  は A で、B です

$N_1$  は、A で B (の)  $N_2$  です (L15)

「 $N_1$  は A で、 $N_2$  は B です」の A・B には、名詞・形容詞・形容動詞がはいり、「この人は医者で、あの人は学生です。」「この町はあつくて、あの町はずずしいです。」「この町はしずかで、あの町はにぎやかです。」といった文を作る。「この町はあつくなくて、あの町はあついです。」のように否定がはいった文もここに含まれる。

「 $N$  は A で、B です」の A・B にも名詞・形容詞・形容動詞がはいり、「この人はわたしの友だちで、医者です。」「この町はずずしくてしずかです。」「この町はしずかできれいです。」といった文を作る。「あの人は先生ではなくて学生です。」のような文も含まれる。

「 $N_1$  は、A で B (の)  $N_2$  です」は「 $N$  は A で、B です」の発展・変形文型で、「この人は、わたしの友だちで医者の山田さんです。」「ここはずずしくてしずかな町です。」「ここはしずかできれいな町です。」といった文を作る。 $N_1$  には「ここ」「そこ」「あそこ」「これ」「それ」「あれ」

「この人」「その人」「あの人」といった代名詞がはいり、N<sub>2</sub>には実質名詞がはいる。なお、A・Bの内容については共起上の制限が多少見られる。

a) AとBは補足的な関係にあるものに限られ、反対の概念は来ない。

例：(×) ここはしずかでさわがしい町です。

(何か特殊な状況を描写する目的でまれに使われることもあるが、初級でそこまで言及する必要はないと思われる。)

b) AがBの意味に直接貢献している場合には、A・Bの位置の交換はできない。これは、次項34の「評価・結果」の構文に近づくためである。

例：(○) これは新鮮でおいしい魚です。

(×) これはおいしくて新鮮な魚です。

(練習方法 1)

例 1 デパートでの品物選びという場面で、店員がいろいろな商品の説明をする。

店員 「このバッグは布製で、そちらのバッグは皮製です。」

「こちらは8000円で、そちらは10000円です。」

「このバッグはやわらかくて軽いですよ。」

「これは高級品でお買い得な品物ですよ。」

その他、アパートさがし(「これは明るくてきれいな部屋です。」等)、美術品鑑賞など、複数の品物の特徴を比較するような場面を設定して練習を行うことができる。

例 2 集合写真を見せながら人物の説明をする。

S<sub>1</sub> 「この人が日本語の先生で、その人が数学の先生です。」

S<sub>2</sub> 「この人は若いから学生でしょう。」

S<sub>1</sub> 「いいえ、その人は学生ではなくて先生ですよ。今年からいらした英語の先生です。」

S<sub>2</sub> 「この女の人はだれですか。きれいな人ですね。」

S<sub>1</sub> 「ああ、その人はさっきの数学の先生の奥さんと、私の友だちの、

ゆき子さんですよ。」

(練習方法 2)

名詞・形容詞・形容動詞の単語をカードに書き、裏返しにしてならべておく。(30~50枚) トランプの「神経衰弱」の要領で一人2枚ずつめくり、その単語を組み合わせて上の文型のどれかにあてはめ、自然な文を発話する。カードでひくのは A・B にはいる単語だけで、N・N<sub>1</sub>・N<sub>2</sub> にはいる単語は、ひいた単語にふさわしいものを自分で考えることになる。なお、カードをひいた順序と A・B の順は無関係でかまわない。どれだけ自然な文が作れたかで得点を与え、一人5回ずつ順番が回ったところで打ち切り、総合点で順位をつける。(文の自然さの段階とそれぞれに与える点数はあらかじめ決めておく。判定は T が行う。)

ゲームを始める前に、前述した共起上の制限について解説しておいた方がよい。

$$34. \quad A \text{ (原因) で } \begin{cases} V \text{ (評価・結果) ます} \\ A_j \\ A_j N \end{cases} \text{ (評価・結果) です} \quad (L15)$$

この文型は、あることが原因で、それを評価したり、その結果を描写したりする時に用いる。「この町はあつくてきれいです。」(評価) 「花がたくさんさいてきれいです。」(結果) のような文である。

(練習方法 1)

T が S に一つの現象文を言わせ、そのあとそれに対する感想や評価を求める。S はそこで出た二つの文をつないで上記の文型の文を発話する。

例 S<sub>1</sub> 「人がたくさんいます。」

T 「どうですか。」

S<sub>1</sub> 「にぎやかです。」

「人がたくさんいてにぎやかです。」

S<sub>2</sub> 「彼の髪は短いです。」

T 「どうですか。」

S<sub>2</sub> 「おかしいです。」

「彼の髪は短くておかしいです。」

.....

(練習方法 2)

前項 33 の(練習方法 1) で用いた, デパートでの品物選びと同じ場面で, 今度は客が品物を評価する場合を想定する。

例 客 「そのバッグは色が派手で好きではありません。」(評価)

「このブラウスは着やすくていいですね。」(評価)

「そのバッグは高くって買えません。」(結果)

「このブラウスはフリルがたくさんあってきれいです。」(結果)

最初の例のように評価・結果に否定の形がくると, 「派手で」の後に少しポーズが置かれるようである。その他, アパートさがし(「この部屋は明るくなくていやです。」等), 美術品鑑賞などの場面でも練習できる。

35. N<sub>1</sub> や N<sub>2</sub> (L15)

並列助詞「や」は, はじめに全体像がイメージされていないと使えないという制限がある。つまり, 全体を言うためにその例示(代表)としていくつかのものごとを取り上げる時に使われるもので, 同類のものとの並列が中心なのである。これに対して, 「と」「とか」は, 何かを見た時に何ら全体像がイメージされなくても, はじから一つ一つ並べ上げるといった意味で使うことができる。それは, 「と」「とか」が個別の並列にポイントを置いているためである。

例 客 「テレホンカードありますか。」

店員 (×) 「はい, 花や列車やパンダや富士山の図柄がありますが  
.....」

(○) 「はい, 花と列車とパンダと富士山の図柄がありますが  
.....」

上の例が不自然なのは, 「花・列車・パンダ・富士山」それぞれの語のレベルが異なり, ここからは何ら全体像が浮かばないからである。これ

を、「動物や植物や乗り物などの図柄」と語の上位概念のみでくくれば不自然さが減少するはずである。

ただ、「と」と同じような場面で「や」が使われていることもある。例えば、「山本君と高橋さん」と言うべきところを「山本君や高橋さん」と言ったりする場合である。「と」を使うと「山本君」「高橋さん」のみに限定されるが、「や」の場合は、その他にも誰かがいるように思わせる効果がある。つまり、話し手に限定する自信がない時や、他にも何かあるようににおわせながらぼかして言いたい時などに「や」を用いるということである。

(練習方法)

① 「や」の特徴である全体像を大切にしながら練習をする必要がある。全体像を拡大・縮小させながらグループの把握の仕方を指導することになる。従って、この練習にともない、上位語・下位語の概念も身につけさせることができるわけである。

具体的には、デパートの売り場案内図などを用意して、Sに見せながらTが質問をしていく。

例 T 「文具売り場には何がありますか。」

S<sub>1</sub> 「ノートやえんぴつや便せんなどがあります。」

T 「7階には何がありますか。」

S<sub>2</sub> 「文具や書籍や玩具があります。」

T 「このデパートには何がありますか。」

S<sub>3</sub> 「日用品や衣料品や食料品があります。」

デパートの内部だけでなく、小売店とデパートの比較などもさせてみるとよい。

② ①とは逆に、Tが具体的な下位概念を並べ、それをまとめる上位概念をSに言わせるという練習もある。

例 T 「この店には、レタスや大根やりんごなどがあります。何の店でしょう。」

S<sub>1</sub> 「八百屋さんです。」

T 「西郷隆盛の銅像や国立博物館や不忍池などが見えます。ここはどこでしょう。」

S<sub>2</sub> 「上野公園です。」

(以上、松木正恵担当)

### 36. Aj-く, AjN-に (L16)

形容詞といわゆる形容動詞の副詞化が学習事項である。

形容詞と形容動詞の連用形は用言を修飾するが、ここでは動詞を修飾する場合のみを扱う。

副詞用法への形の変換については学習上の困難はない。

ここでは本学の教科書(初級)の語彙の範囲に限り、実用的なレベルに立って、初級段階で指導上留意した方がよいと思われる具体例をまとめることにする。ただし、その中で必要なものだけを、状況に応じて、学生に与えればよいのであって、他は教師が心得ておくだけでよいであろう。

- (1) 「多い」の連用形「多く」が副詞として用いられる場合は、「多く(は)失敗する」などの例にみるように「たいてい(の場合)」の意になる。しかし、この用法を初級で教える必要はない。初級では数量や頻度の副詞として、「たくさん」「おおぜい」「たいてい」「よく / しばしば」などの語を、それぞれと共起する基本動詞と共に教え、「多く」という語は用いないことを注意しておくべきだろう。
- (2) 「おもしろく話す」は自然な日本語であるが、「おかしく話す」は不自然である。「おもしろおかしく話す」と言わねばならない。
- (3) 「おそく」は時間的な意味で用いられ、速度については「ゆっくり」を使う。

例：おそく家を出た。

ゆっくり歩く。

同種のものとして、「長く」は時間的・空間的双方の意味に用いられる。時間的な意味の場合、「長く」を用いることはできるが、その反

対の意を「短く」で表現することはできない。例えば「日本に短く住んでいる」は誤りである。

(4) 「ほしい」の連用形「ほしく」は動詞「なる(成る)」以外とは共起しない。初級では「ほしいと思う」を教えるべきであって、「ほしく思う」を与える必要はない。

(5) 「めずらしく」はその文が意味する事象がめずらしいということを表している。

例：彼女はめずらしく料理を作った。

(6) 「やすく・買う / 売る」は通常より安い値段での売買を意味し、日常よく使われる表現である。反対の意は「たかく」を用いて表す。

(7) 「よい(いい)」の連用形「よく」は「言う / 話す / 思う」などの動詞と結びついて良い評価や好意的な気持を表す。同種のものとして、「ありがたく思う」「残念に思う」「面倒に思う」などの日常的な表現がある。これらは各々、何かが「ありがたい / 残念である」などという、主体の心情を表す。

#### (練習方法 1)

教師が予め動詞と副詞のセットを作って学生に与える。学生はいつも肯定文で答えることにしておく。T のことばの中に Aj が出たら、S は次の発話でそれを副詞化する。

T 「壁をぬりましたか。」

S 「はい、ぬりました。」

T 「今度の壁は白いんですか。」

S 「はい、白くぬりました。」

#### (練習方法 2)

困る (or いい) 人 (or 恋人・おとうさん・主人・赤ん坊・飼い犬, etc.) その人に対する評価と理由をひとこと言う。「Aj-くまたは AjN-に」を使う。

S 「うちの主人には困ります。」



T 「どうしてですか。」

S 「毎晩おそく帰って来るんです。」

(練習方法 3)

上記とほぼ同じであるが、動詞を特に「なる」に限って練習する。自分の好悪を言わせ、その理由を付加させる。

S 「牛乳はきらいです。飲むと気持ちが悪くなるんです。」

### 37. V なさい (L16)

教科書付属の文法書には「主として子どもに対して使われる表現」という説明がある。

命令または助言をする際に用いられる形であるが、この表現の特質は、使用上から見た場合、命令形としては「おだやかな感じの命令形」、助言としてはかなり「高びしゃな助言」という点にあるのではなからうか。この言い方が子どもに対しての他は実際上ほとんど用いられないという理由もこの点にあるように思う。例えば、交通違反の車に対する警察官の命令は「その赤い車、もっと後ろへさがりなさい。」というおだやかな形をとっている。この、「命令」が当然と思われる場合でさえ、普通体の動詞「さがる」の命令形「さがれ」では乱暴すぎるようである。つまり、おとな同士の間では命令形を用いて命令するのはむしろ特殊な状況だといえよう。(→29. Vてください)

命令形のおだやかな形ということから、男性の用いる普通体動詞の命令形に対応する女性語としても「V なさい」が用いられることになる ((4)例2)。

そこで「V なさい」が使われる最も自然な状況として、次のような話し手と聞き手との関係が考えられる。

#### (1) 親と子(または家庭内を中心とする親族)

例 手を洗って洋服を着換えたら、おやつを食べなさい。

#### (2) 教師と生徒(さまざまな師弟関係)

例 この文型を使ってもう一度書き直しなさい。

ただし、この関係の場合でも、もっといいえいな方がよいと判断されるときは他の表現を用いて命令・助言をする。

### (3) 医者と患者

この関係のときでも、まともに「V なさい」の形を使うのは、患者が医者よりかなり年少の場合であろう。通常は次のような形で命令すると思われる。

例 何よりも規則正しい生活をするようになさい。

### (4) 女性語としての命令形(人間関係ではないが)

#### 例 1

父： 一郎，夕飯まえに，お父さんと一緒にジョギングしないか。

そんなに勉強ばかりしていないで，仕度して来いよ。

母： お父さん，だめですよ。一郎ちゃん，6時半まで勉強(し)なさい。あとひと月なんだから頑張りなさい。

#### 例 2 (切迫した危険から相手を救うために)

とびおりなさい!

ただし、この種の緊急の状況では女性によって普通体動詞の命令形がそのまま発せられても自然である。

教室内での練習方法としては、上記の人間関係に立って、いろいろな場面を設定し対話ができるだろう。

## 38. V ています (L17)

### I. 文型の表す意味——「継続」

数種類の日本語教科書とそれに付属の文法解説書を参考にして、初級で教えるべき内容と指導上留意した方がよいと思われる点を下記のように表にまとめてみた。(この表は学生に提示するためのものではない。)

表について以下の点を付記する。(番号は表中の番号に順ずる。)

(1) 動詞の種類は金田一春彦の分類による。

(2) 「～動詞が多い」と言っているが、この「多い」という事実は教授法の上から見た場合、留意すべき点であると思われる。なぜなら言

継続の種類	意味する内容	動詞の種類 (1) (ふつうの場合)		副詞(句)の性格 (3)	例	会話例
動作・作用の継続	当該時点で進行中	継続動詞が多い (2)		点状副詞(句・節) 例: いま, 3時に, ~のとき	いま話している。 訪ねたとき食事をしていた。	1 2 3 4
	当該時間内に於て継続	同上		線状副詞(句・節) 例: ~から, ~じゅう	朝から本を読んでいる。 一晩中雨が降っていた。	1
	当該期間内に於ける反復・習慣	同上		線状副詞(句・節) 反復・習慣を表す・またはそれを察知させる副詞(句・節) 例: この頃, 毎朝	このごろ寮では日本語を話している。 毎朝6時に起きている。	5
状態の継続	動作・作用の結果の継続 (4)	瞬間動詞が多い	動作の開始時点が明確	反復・習慣を表す副詞を除く。	入っている。始まっている。起きている。死んでいる。	3
			動作の開始時点が不明確・形容詞的	点状・線状副詞(句・節)	疲れている。 ふとっている。	3
	ふつうこと型で表現するもの (5)	慣用的に限られた幾つかの動詞		点状・線状副詞(句・節)	知っている。住んでいる。持っている (所有)。 売っている。似ている。	3 5

語行為の自然さとは使用上の習慣, つまり頻度や傾向の問題ではないかと考えるからである。

- (3) この文型を教えるときに心得ておくべき重要な点は, 文型の意味する内容が動詞自体によって決まるのではなく, (3) の縦の欄に示すような副詞の要素によって決定するということであろう。同じ「話す」でも「いま話している」と言えば, ふつうは進行中の動作を想起

するが、例の欄に示すように「このごろ」を付けたり、「寮では日本語を話している」と言ったりすれば、習慣的行為と受け取られるのがふつうである。

(4) (→ 46. V ています)

(5) (2) に述べたのと同じ理由で、この分類は教授法の上から意味があると考える。

## II. この文型が自然に出てくる基本的条件

継続の種類*	発話時の状況(対象について)		伝達形式	会話例
	話し手	聞き手		
進行中の動作	見ている (更に一般的には自分の 感覚で捉えている)	見ていない (...同左... ...捉えていない)	報告・描写	1 2 3
	見ている (同上)	見ている (同左)	確認 意見交換	4

\* 他の種類の継続に関しては特有の条件を考慮する必要はない。

## III. 例文を作成するときの視点

以下に述べることは極くあたりまえのことであるが、作例をしたり、学生の作文にヒントを与えるときに、一つの手順になればと思い、敢えて提示する。

表現にとりあげられる対象は、まず大きくは人間界と自然界に分けられるだろう。それらを三つの視点から眺めてみる。

- a. 時間的——過去・現在・未来 / 春夏秋冬 / 曜日 / 朝昼晩 etc.
- b. 空間的——国家(歴史的事象 / 国際関係 etc.) / 地域社会(行事 / 習慣 / 近所づきあい etc.) / 学校(同窓会 / 実験室 etc.) / 職場(事務所 / 工場 etc.) / 家庭(居間 / 台所 etc.) / 自然現象(季節 / 災害 etc.) その他、学生の専門分野に応じて経済・社会現象などについて述べさせることもできよう。

c. 文型の表す意味 (I の表) 及びこの文型が出てくる基本的条件 (II の表)

上記 a, b, c の各要素の組み合わせによって出来る状況の中で具体的な場面を考案する。

このようにして作成した場面の例を以下に提示する。

例 1 修学旅行先からの電話(普通体の会話 / 現在形)

母 「そちら、京都はどう？」

娘 「うん、桜が咲いてて、すごくきれい。」

母 「そう。みんな何しているの。」

娘 「いろんなことしてる。せつ子は絵がき書いている。渡辺さんはあしたの見学予定を考えているわ。」

母 「鈴木さんも同じグループ？」

娘 「うん、鈴木さんはいまロビーでいとこと話してるの。京都に住んでいるところがホテルに会いに来てるのよ。おじいちゃんももうねてるの？」

(この種の会話としては、国際電話、気球に乗って上空からのレポートなど通信形式の会話が考えられよう。)

例 2 海辺の大地震(ていねい体の会話 / 過去形)

放送局の Reporter と被災地の住民との会話

リ 「地震が起きたとき、どこにいましたか。」

市民 「ビルの 6 階で仕事をしていました。すぐ下にかけておりて外に出ました。」

リ 「そのとき外のようなはどうでしたか。」

市民 「人がおおぜい走りまわっていました。そして男の人がひとり大声で叫んでいました。」

リ 「大変な騒ぎだったんですね。」

市民 「ええ。子どもたちが泣いていました。あっちこっちで犬が吠えていましたね。」

例 3 台所で

母 「おいも、どうなっている？」

娘 「小さいのはだいたいゆだっているけど、大きいのはまだかたいみたい。」

母 「それから、冷蔵庫に入っているゼリーは固まったかしら。見てちょうだい。」

娘 「ええ、もうできているわ。きれいで、おいしそうよ。」

例 4 すもう観戦

アナウンサーと解説者との会話

ア 「東山、うまくとっていますね。」

解 「東山は今場所足腰がいいから、すきを見て一気に前に出ようとねらっているんだと思いますよ。」

ア 「東山の足がジリッジリッと動いていますか……」

解 「そうですね。」

(投球のように瞬間動作のスポーツはこの種の会話の材料として適当でない。また、マラソンのように競技中に全体的な局面の変化はあっても動作の種類そのものに変化のない動きも、この文型の会話には不適當である。この状況の会話としては、他に、観劇、動物園・工場見学、市内観光などを写真や静止テレビ画面を使って教室内で行うことができる。)

例 5 高校の同窓会

教 「佐々木さん、あなたは今どこに住んでるの。」

佐 「実家のすぐ近くです。ですから高校時代とあまり変わっていません。」

教 「今も歌っているの。」

佐 「いいえ、先生。ただもう家事に追われているだけです。苦勞して声楽科に入れて損したって、いつも親たちが言っているんです。」

ここに示した会話例においては「V ています」の表現がいずれもこの文

型のもつ基本的な意味を表している。われわれの実際の生活の中ではその状況に応じて「V ています」という表現がさまざまな発話目的をもって使われるだろう。例えば次の対話においては話し手は勧誘の意味でこの文型を用いている。

A: 寒いですね。

B: 控え室にコーヒーが入っていますよ。

教科書 17 課の本文にある「弟は今おふろに入っています」もこの種の発話といえよう。つまり「V ています」は単なる叙述ではなく、勧誘、理由、抗議、弁解、驚き等々、さまざまな意味合いをになって登場する。しかし、それらは基本的な意味がわかっているならば、通常は話し手の意図が理解できるはずであるし、話者としてそのように使うことも可能なはずである。授業で教授すべきことはやはり第一義的には文型のもつ基本的な意味であると思う。

(以上、安齋幸枝担当)

### 39. $N_1$ を $V_1$ に $N_2$ (場所)へ / に $V_2$ ます (L18)

この文型にはふたつのバリエーションがあり、「 $N_1$  を  $V_1$  に」を  $\text{A}$ 、「 $N_2$  へ / に」を  $\text{B}$  とすると、 $\text{A} \cdot \text{B}$  が入れかわっている点がことなる。すなわち、つぎようになる。

i (人)は  $\text{A}$   $N_1$  を  $V_1$  に  $\text{B}$   $N_2$  (場所)へ / に  $V_2$  ます。

ii (人)は  $\text{B}$   $N_2$  (場所)へ / に  $\text{A}$   $N_1$  を  $V_1$  に  $V_2$  ます。

主語には「私」「あなた」「〇〇さん」「先生」「父」「母」などいろいろな人物の呼称を入れることができる。「 $V_2$  ます」には帰去往來の動詞を入れる。

この文型を導入する際に留意すべき点は、「(人)は(場所)へ / に——ます。」という構文をしっかりと身につけさせることである。すでに第 7 課で、「(人)は(場所)で——する。」という文型を学習しているため、混同して、「(人)は(場所)で——ます。」という誤りを犯すことが多い。とくに、 $\text{A}$  を挿入するとこの誤りは多くなるので、まず基本となる「(人)は(場所)へ /

に――ます。」をしっかりと覚えておきたい。『初級教科書』では「N<sub>2</sub>へ / に」が先に来る形、つまり、上に掲げた ii の形を a とし、i の形を b としているが、この誤りを防ぐためには「N<sub>2</sub>へ / に」と「V<sub>2</sub>ます」とがつづいている i を中心に学習し、そのバリエーションとして ii を練習するとよいであろう。

この文型は冒頭の文型でわかるとおり、

(人)は / **A** / **B** / ――ます。

という4つの要素からなっている。したがって、基礎的なドリルを終えたつぎの段階としては、この4つの要素のうちのどれかを与え、それに対応するように残りの要素を補って文を完成する練習が考えられる。この文型は状況によっては繰り返すことが不自然になる場合があるので、その点注意が必要である。たとえば、単に一日の行動を追うといった場面設定はこの文型の練習に適當ではない。またアリバイ調査では「(人)は(場所)で――する。」を使うほうが自然であり、素行調査の探偵の記録など、ある期間にわたる行動の記録のほうが適しているようである。

(練習方法 1) パーティーをひらこう その1

ここではクラスの全員が集まってパーティーをひらくことを計画するという場面を設定する。各自にメモを渡し、スケジュールの調整をはかる作業をすすめる。各自に渡すメモは第1段階では図1のように「歌舞伎」・「テニス」・「野球」などを書き入れておく。つまり、文型の4つの要素のうち**A**の「N<sub>1</sub>を」を与えるわけである。この場面設定では「私は... 行きます。」は常に固定されているので、**A**の一部を与えることによって学習者は**B**を補い、文を完成させればよい。

具体的なすすめ方としては、まず教師が一日ごとに各自のスケジュールを聞いていく。

例

T 「それではみなさんの御都合をうかがいましょう。4月30日はどうですか。」



S<sub>1</sub> 「私はお芝居をみに銀座に行きます。」

S<sub>2</sub> 「私はテニスをしに横浜に行きます。」

S<sub>3</sub> 「私は買い物をしにデパートに行きます。」

など。

予定のない日をつくっておくことももちろん可能であるが、移動のない場合にはこの文型は使えないことを指導しなければならない。

例 「私は部屋で勉強をします。」

「私は都合がいいです。」

など。

### (練習方法 2) パーティーをひらこう その2

メモを渡して各自のスケジュールを調整することは1と同様である。第2段階としてはメモに場所を書きこんでおき、**A**を補って文を完成させる(図2参照)。ここではスケジュールの調整役も学生にまかせてよいであろう。

例

S<sub>1</sub> 「それではみなさんの御都合をうかがいましょう。5月3日はどうですか。」

S<sub>2</sub> 「私は展覧会をみに上野に行きます。」

S<sub>3</sub> 「私はテニスをしに横浜に行きます。」

など。

1と2とはクラスのレベルによっては分けずに二種類のメモを無作為に渡してもよいし、一つのメモに**A**の情報と**B**の情報とを混在させてもよい。むしろ、手帳に書きこむときはそのような状態が自然であろうし、最終的にはそのようなメモを使用することを目標とする(図3参照)。

### (練習方法 3) パーティーをひらこう その3

パーティーをひらく日時が決まったら、パーティーの内容を考える作業に入る。ここではパーティーに必要なものを列挙し、誰がどこで調達するかを決めるときにこの文型を使うことにする。

4月/5月	
㊦ 日	10:00- 映画
1 月	
2 火	
③ 水	11:00-4:00 歌舞伎
④ 木	10:00-12:00 テニス
⑤ 金	1:00- 野球
6 土	

図 1

4月/5月	
㊦ 日	9:00 銀座
1 月	6:00 池袋
2 火	
③ 水	10:00 浅草
④ 木	9:00 新宿
⑤ 金	12:00 信濃町
6 土	

図 2

4月/5月	
㊦ 日	9:00 銀座
1 月	6:00 池袋
2 火	
③ 水	11:00-4:00 歌舞伎
④ 木	10:00-2:00 テニス
⑤ 金	12:00 信濃町
6 土	

図 3

1 日目	新宿	高層ビル
2 日目	銀座	歌舞伎
3 日目	池袋	おみやげをかう

図 4

T 「用意するものはこれでいいですね。それではどうやってそろえ  
ましょう。」

S<sub>1</sub> 「私と〇〇さんは、お菓子を買いに店に行きます。」

S<sub>2</sub> 「カラオケのテープは△△さんが持っています。私はテープを借  
りに△△さんのうちに行きます。」

など。ただし、この場合には、わざわざ出向いて揃えるという意識の強  
いものにしか使えない。したがって、カラオケセットやゲームやビデオな  
ど、揃えるものに工夫が必要であろう。

#### (練習方法 4) 旅行の計画 その1

自分のところに知人が滞在することになり、案内の予定をたてる、とい  
う場面を設定する。案内するところは自分の国でもよいし、日本のどこか  
でもよい。期間は3日間分くらいが適当であろう。文型の4つの要素のう  
ち「(知人と私は)——(行きます)」を固定し、・を補って文を完成  
する練習である。図4のような簡単なメモを作らせ、それを見ながら説明  
させる。この場合、実際の発話では「(知人と私は)」の部分は省略しても  
よい。

例

S 「1日目には、高層ビルをみに新宿に行きます。2日目には、歌舞  
伎をみに銀座に行きます。3日目にはおみやげをかいに池袋のデ  
パートに行きます。」

など。

上記のような大まかな予定から、しだいに詳細な予定になるように指導  
する。

#### (練習方法 5) 旅行の計画 その2

自分の旅行の計画をたてる。ここでは1日の外出を想定し、図5のよう  
な簡単な資料を渡し、それぞれに計画をたてさせる。ここでも簡単なメモ  
をつくらせ、それに沿って計画を説明させる。ここでも「(私は)」の部分  
は省略させてよいであろう。

例 「最初にお茶を買いにごくうに行きます。それから、ぼうしを買いにぼうえきこんすに行きます。それからレコードをさがしにはつみに行きます。それからフルコースをたべにまんちんろうに行きます。そして帰ります。」

など。

なお、図 5 は、第 18 課・第 19 課を学習しおえた段階で、総合練習ができるようになってきている。つまり、つぎのような文型を用いて旅行のはじめからおわりまでを説明することができる。

例 私は船で山下公園に行きます。(18-3)

(店の)かどを右にまがります。(18-4)

おみやげを買いに店に行きます。(18-1)

友だちにおみやげを買います。(18-2)

くつを一足買います。(19-1-a)

一足 980 円です。(19-2)

電車で東京にもどります。(18-3)

など。

#### (練習方法 6) 旅行の計画 その 3

自分の行きたいところを選び何泊かの旅行の計画をたてる。初級段階であるので資料は日本語のガイドブックでなく手持のものを利用すればよいであろう。これもメモを作らせ、口頭で説明させる。

#### (練習方法 7) 手紙

文章表現としては、手紙を書くのがもっとも自然であろう。日記の場合には一日だけではなく、たとえば夏休みや連休など何日かの記録を考えさせるほうが自然であろう。「初級教科書」第 18 課は「きのうの日曜日」という題で日記風の文章になっている。この教科書では第 37 課に「日記」があり常体の記述である。第 38 課が「手紙」であり第 18 課の段階で細かい手紙のきまりなどを学習させる必要はないが、簡単な書き出しと結びを教えたうえで手紙で自分の行動を報告する、という課題でこの文型を使わせ

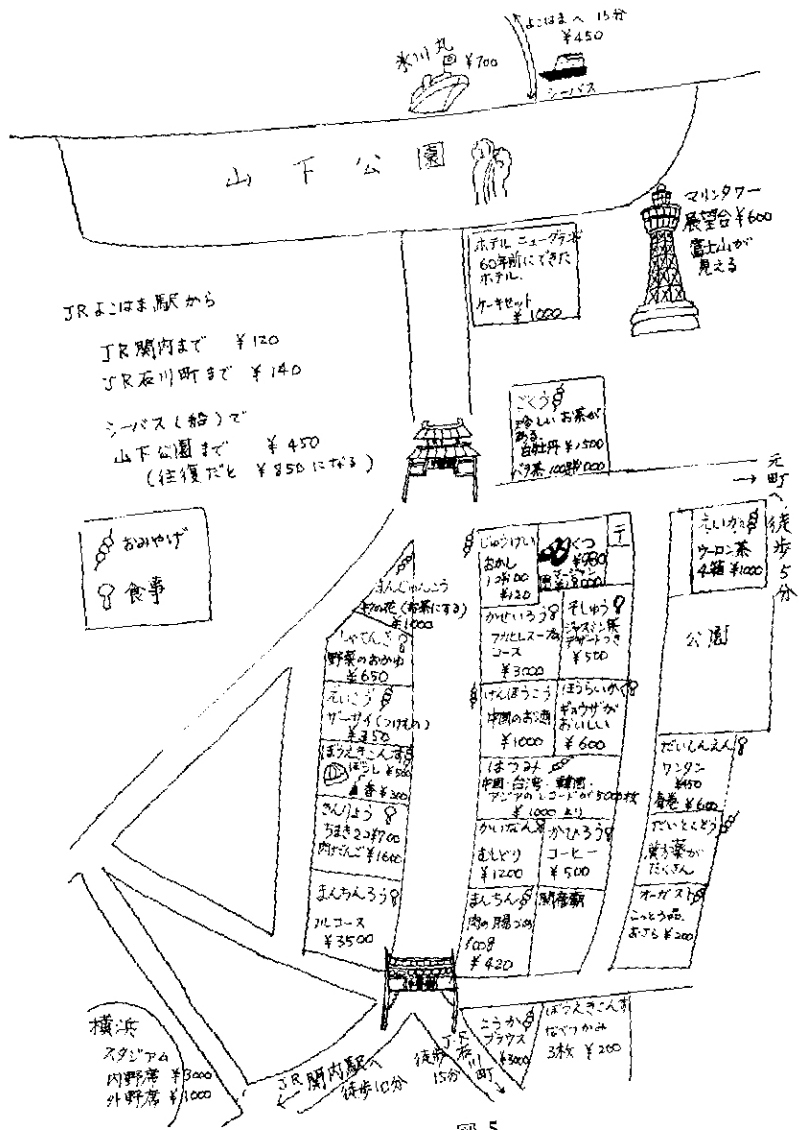


図 5

る。

(以上、今野尚子担当)

#### 40. V<sub>1</sub> ながら V<sub>2</sub> (L20)

まず、V<sub>2</sub> の動作をさせて、つぎに V<sub>1</sub> の動作をさせる。どちらの動作が、主動作なのか、ながらの動作なのかを確認しつつ、表現させることが大切。

(練習方法 1)

S<sub>1</sub> に、まず勉強をする動作をさせる。つぎに、その動作は継続したまま、テレビを見させる。そこで、S<sub>2</sub> に S<sub>1</sub> の動作を描写させる。「S<sub>1</sub> さんは、テレビを見ながら、勉強をしています。」ほかにも、お菓子を食べる、話をする、お茶を飲む、などの動作を組合せ、同様に表現させていく。

(練習方法 2)

「ながら」の基本的な用法がつかめたら、母親と子供との会話などの場面設定で、「～てはいけません」(L26) と組合せて表現させる。

例 子供 テレビを見ながら、勉強をしている。(S に指示を与え、実際にその動作をさせる)

母親 「～(ちゃん)、テレビを見ながら、勉強してはいけませんよ。」

#### 41. V<sub>1</sub> てから V<sub>2</sub> (L20)

実際の動作の順序を意識しながら表現させる。

(練習方法 1)

シャツを着る、ズボンをはく、ネクタイをしめる、帽子をかぶる、などや、～を脱ぐ、～をとる、などの着脱の動作について、S<sub>1</sub> が指示し、S<sub>2</sub> が動作をする、また S<sub>3</sub> がその動作を言葉で表現する。

例 S<sub>1</sub> 「ズボンははいてから、ネクタイをしめてください。」

S<sub>2</sub> (指示のとおり動作を行なう)

S<sub>3</sub> 「S<sub>2</sub> さんは、ズボンははいてから、ネクタイをしめました。」

(なお、このとき S<sub>3</sub> は、S<sub>1</sub> の指示は聞かずに、S<sub>2</sub> の動作だけを見て言うほうがよい)

(練習方法 2)

昨日の出来事を、時間の順を追って報告する。(行動記録の書かれたカードを使って、他の人の報告をしてもよい。)

今日の予定を、時間の順を追って報告する。(秘書、ツアーコンダクター役になって説明する。)

(練習方法 3)

(ゲーム) アリバイ調査 S<sub>1</sub>—刑事, S<sub>2</sub>—容疑者, などの役で。

例 S<sub>1</sub> 「昨日の午前9時には何をしていましたか。」

S<sub>2</sub> 「図書館で本を読んでいます。」

S<sub>1</sub> 「図書館で本を読んでから何をしましたか?」

S<sub>2</sub> 「喫茶店に行きました。」

S<sub>1</sub> 「それから?」

S<sub>2</sub> 「...てから、～をしました。」

42. —そうだ(様相) (L20)

何かを見て「—そうですね。」と言うだけで終わらせずに、それを切っ掛けにして会話を展開させていく。

(練習方法 1)

空模様に関する会話。S<sub>2</sub>には実際に空を見ながら答えさせる。

例 S<sub>1</sub> 「あしたは晴れそうですか。」

S<sub>2</sub> 「いいえ、雨が降りそうですね。」

/ S<sub>2</sub> 「そうですね、雨は降りそうもありませんね。」

(練習方法 2)

「—そうですね」の後に、自分の気持ちなどを併せて表現させる。

例 「おいしそうですね。わたしも食べたいな。」

「むずかしそうですね。わたしにできるかな。」

「雨が降りそうですね。困ったな。(かさを忘れた)」

「重そうですね。持ってあげましょうか。」

(練習方法 3)

「一のです」(L21)との組合せで表現させる。(→45)

例 (料理を見て)「おいしそうですね。だれが作ったんですか。」

#### 43. V てあげる, V てもらう, V てくれる (L20)

「一てあげる」は恩恵を与える意味が強くなるので、自分の行為には用いないようにさせる。

「一てもらう」は、自分ではできないことを「一てもらう」ので、うれしい、感謝するという気持ちがあることを理解させる。

(練習方法)

S<sub>1</sub> が依頼し, S<sub>2</sub> がそれに応じる動作をする。その後, S<sub>1</sub> がそのことを報告, S<sub>3</sub> は描写する。

例 S<sub>1</sub> 「すみませんが、～てくれませんか / くれますか / ください。」

S<sub>2</sub> 「いいですよ。」と言って、依頼された動作をする。

「どうもありがとうございました。」

報告 S<sub>1</sub> 「S<sub>2</sub> さんに～てもらいました。」

「S<sub>2</sub> さんに～もらって助かりました。」

「S<sub>2</sub> さんに～もらっちゃった。」

「S<sub>2</sub> さんが～くれました。」

描写 S<sub>3</sub> 「S<sub>2</sub> さんは, S<sub>1</sub> さんに～あげました。」

「S<sub>1</sub> さんは, S<sub>2</sub> さんに～もらいました。」

#### 44. A たり B たり (L20)

X が, A たり, B たりする。

X が A たり, Y が B たりする。

A たり, B たりする。

X が, A たり, A なかったりする。

X が A たり, Y が A なかったりする。

A たり, A なかったりする。

上記の基本的な形式を習得させてから、練習にはいる。

(練習方法)



質問には、「いつも、ずっと、一日中、日本中、みんな、毎日、どこでも、だれでも、全部、たえず」などを、答えには、「{日、週、年、時、人、場合、場所、ところ、物、状況、気分}によって」などを入れて練習させる。

例 S<sub>1</sub> 「授業は毎日 9 時から始まるんですか。」

S<sub>2</sub> 「そうですね、日によって 9 時から始まったり、10 時から始まったりしますよ。」

S<sub>2</sub> 「そうですね、日によって 9 時からだったり、10 時からだったりしますよ。」

S<sub>2</sub> 「そうですね、日によって 9 時だったり、10 時だったりしますよ。」

S<sub>2</sub> 「そうですね、日によって 9 時だったり、10 時だったり、いろいろですね。」

S<sub>2</sub> 「そうですね、日によって 9 時だったり、10 時だったり。」

S<sub>2</sub> 「そうですね、日によって違いますね。9 時だったり、10 時だったり。」

上のように、いろいろな答え方をさせる。

#### 45. 一のです (L21)

のだ文の基本的な用法はつぎのように考えられる。

(平叙文)

相手の知らない(と表現主体が判断した)もの・こと・情報を一括して示す。例「実はわたしの国籍はアメリカなんです。」

理由や事情などを説明する。例「明日休ませていただけますか。風邪をひいてしまったんです。」

(疑問文)

(疑問に思うようなもの・こと・情報・事態が先にあって)それに対する説明を要求する。もっと知りたい、本当のことを教えてほしい、すでに知っている情報を確認したい、という気持ちを表す。例「日本人は本当に働

き者なんですか。」

また、驚きの表現にもなる。例「あんな所へ行ったんですか。」

(練習方法 1)

S<sub>1</sub> は疑問に思うようなもの・こと・情報・事態について、いつ、どこ、だれ、なに、なぜ、どうして、どうやって、などの疑問詞を用いて質問する。S<sub>2</sub> は、それに答える。

(練習方法 2)

みんなの知らないようなもの・こと・情報について説明する。

例 「この字は、こういうふうを書くんです。」

「この道具は、このようにして使うんです。」

「これは、水に入れると大きくなるんですよ。」(おもちゃの説明)

(練習方法 3)

自分の事情を説明しながら、依頼などをする。

例 1 S 「すみません、お願いしたいことがあるんですが。」

T 「どうしたんですか。」

S 「実は〇〇大学を受けたいんです。それで、推薦状を書いていた  
だきたいんです。」

例 2 S 「きのう休んでいたの、よくわからないんですが、説明して  
いただけますか。」

(練習方法 4)

S<sub>1</sub> は「—そうだ」(様態)との組合せで、そう見える理由を尋ねる。S<sub>2</sub> はその理由を説明する。

例 1 S<sub>1</sub> 「うれしそうですね。」

S<sub>2</sub> 「今日はデートなんです。/ 日本語の授業がないんです。」

例 2 S<sub>1</sub> 「S<sub>2</sub>さんは悲しそうですね。」

S<sub>2</sub> 「試験に落ちてしまったんですよ。」

S<sub>1</sub> は、さらに「どうしたんですか」を加えて尋ねる。

46. V ています(結果の状態) (L21)

動作の進行の「一ている」との違いを、「本を読みます。読んでいます。読みました。」「すわります。すわりました。すわっています。」などの動作つきの例で確認してから練習にはいる。(→ 38)

(練習方法 1)

「並ぶ」「立つ」「すわる」「起きる」「寝る」などの動作を実際にみんなにさせて S<sub>1</sub> がそれを描写する。「まだ」「もう」とも組合せて表現させる。

例 「S<sub>2</sub>さんはまだ寝ていますが、S<sub>3</sub>さんはもう起きています。」

(「S<sub>2</sub>さんはまだ寝てますが、S<sub>3</sub>さんはもう起きてます。」)

(練習方法 2)

天候に関する会話。「晴れている」「曇っている」「雲が出ている」「お日さまが出ている」など。過去形も使って表現させる。「朝は曇っていましたが、もうすっかり晴れていますね。」など。

(以上、蒲谷 宏担当)